

令和6年11月22日

11月の木材価格・需給動向

1. 国産材(北関東)

栃木県では11月に入り、虫害の心配もなくなり、間伐・皆伐とも作業は順調に進んでいる。9月豪雨による県西地域の搬出路等の復旧が順調に進み搬出作業は軌道に乗った。虫害の心配がなくなり、新材として入荷している材は引き合いが強く、単価も市日毎に上昇している。スギは3.0m柱材で18,000円台、4.0m中目材も17,000円台に届く勢い。ヒノキ材は3.0m柱材で19,000円台、4.0m中目材は24,000円台で推移している。

群馬県では原木不足で特にスギ4.0m材が集荷が困難である。製材工場の原木在庫はスギ、ヒノキの3.0m、4.0mともに少ない。原木不足と人手不足で操業は通常の70%程度。首都圏・地場向けとも低調で年末に向けての需要も見込めない。在庫は間柱、仮筋、貫等は少なく、割物や破風板類はダブっている。

2. 米材

10月の米国住宅着工数は131.1万戸(年率換算)で前月比3.1%減、前年同月比では4.0%減となった。米国製材品市況は製材工場の採算ラインである\$400/MBFの手前の\$398で足踏み状態にあったが、10月に入って\$400を超えて上昇。ランダムレングス紙発表の15種平均価格(11/6)は430/MBF、10月頭に比べ8.6%のアップ。FEDの利下げ期待が後退し、市中金利が約1%上昇する中、製材品価格の上昇がどこまで続くのかが注視される。米国内、中国、日本の原木需要が低調な中、伐採は順調であるため原木の港頭在庫は潤沢な水準。米マツIS級並の11月積み対日輸出価格は未確認情報ながら前月比横ばいの\$940/千SCRで決着した模様。

9月原木入荷は124千 m^3 で前月より増加となったが、中国地区への入荷が9割超と偏重、1~9月累計では1,131千 m^3 (前年同期比18.8%減)。出荷は106千 m^3 で低調、出荷も中国地区に偏重、1~9月累計では1,156千 m^3 (同17.0%減)となった。在庫は184千 m^3 、在庫率は1.47ヵ月。東京木材埠頭の10月製品入荷は8千 m^3 (前月比25.4%増)、出荷は13千 m^3 (同15.9%増)、在庫は35千 m^3 (同13.5%減)。米材製材国内最大手が2ヵ月連続で米マツ平角製品の値下げを行った。

3. 欧州材

第4・四半期(10~12月積み)交渉の終盤、日本側に買い気がなく、産地側も価格調整に応じざるを得ない状況で、交渉の結果、第3・四半期より€20~30の値下がりとなった。ただしオファー数量は絞られる。産地側はインフレにより原木、製材コスト、人件費等のあらゆるものが上昇しており、値下げできる状況にはないが、一時的な調整である。国内市場での間柱類の投げ物、処分物は無くなったが、相場は未だ弱い。5月以降の大きな混乱は収まった感があり、今後入荷が減少することから徐々に回復基調となる模様。中国木材の10月再値下げにより集成柱・梁の市況は混乱している。第4・四半期価格の値下げ決着で暫くは相場は弱いと見られる。9月入荷は21千 m^3 と前月より減少したが、出荷が伸びず入超となった。入荷のピークは越え、10月以降は減ってくると予想される。出荷は17千 m^3 と極めて低調。9月末在庫は65千 m^3 に膨らんだが、これがピークで今後調整されてくる。

4. 北洋材

産地では気温が下がらず、悪路のため伐採は低調で搬出は事実上停止となっている。工場の原木在庫は極めて薄く、特にアカマツが少ない。中国からの引き合いは依然低調で変わらず。ウズベキスタン等向けの低グレード品の引き合いは堅調である。アカマツ完成品の産地価格は\$590/ m^3 が標準となっている。日本側は円安、実需不足のため値下げを求めるが、シッパーは赤字と生産減を背景に応じてこない。国内でのアカマツ野縁製品は10万円半ばを維持している。上級グレードの不足と高値張り付きにより中級グレードへの引き合いが強まっている。10月の製品入荷(東京+川崎)は現地滞留材か集中入荷したため15.0千 m^3 と増加。出荷は12.0千 m^3 と多いが、倉庫移動とみられ実需ではない。在庫は31.8千 m^3 で11月も同水準が予想される。

5. 合板

原木の入荷は順調だが、認証材の入荷がやや減少傾向にある。10月に合板メーカーが直需系中心に値下げに動き、一向に値上げのきっかけが掴めず、ダラダラムードが続いている。9月の合板生産量は21.1万 m^3 。うち針葉樹構造用合板の生産量は18.6万 m^3 、出荷量は18.5万 m^3 、在庫量は16.7万 m^3 で前月より1.1千 m^3 増加。需給バランスは何とか保たれている。輸入合板の荷動きは国産合板同様良くない。円安で今後入荷コストは実質値上げに向かう。9月の合板輸量は17.8万 m^3 で前月より減少し、適正な入荷といえる。関東主要の港頭在庫は減少傾向。マレーシア・インドネシア現地シッパーへの日本か

らのオーダーはそれほど多くはない。

6. 構造用集成材（国内産）

10月のラミナ入港量は9月に比べ多いが、適正在庫である。今後需要減により契約量を絞っていく動きになる。第3・四半期契約のラミナ価格（CIF）は€280～290/m³程度。円安傾向で仕入コストは上昇傾向。国内集成材メーカーの荷動きは停滞気味で、在庫はやや多めで今後、在庫量を絞っていく動きになると予想される。原価、運賃の高騰にもかかわらず、住宅需要の減少により価格は弱含みである。9月の構造用集成材の輸入量は小断面 30,862 m³（前年同月比 54.7%増）、中断面 20,603 m³（同 72.4%増）となり、在庫量は増加。

7. 木材チップ（東海）

原木は製紙・バイオマス発電用とも小径材（C材）の引き合いが強い。入荷は例年並み。燃料材では建廃の入荷は例年並みだが、冬場に向い不足感が根強い。能登半島地震の震災廃棄物（木くず）の処分が本格的に開始され、北陸3県に大量の木くずが搬出されている。大手製紙会社では用紙、板紙ともに抄物の集約化を進めており、原料構成が変化している。総じて製紙用原料は減少。バイオマス発電の燃料用は旺盛な消費が継続中だが、フル運転できない発電所もある。原料用の在庫は横ばいだが、燃料用は在庫のない発電所もある。

8. 市売問屋

11月に入っても荷動きは良くなく、荷物がダブつき気味になっている。今年はこのままの市況で終わると見る向きが多い。戸建住宅が少なくなっているため、スギ、ヒノキのKD構造材の動きが悪い。外材構造材も同様である。造作材も材木店の仕事が少ないため、纏まって荷が動くことがない。米ツガ、スプルースの造作材も価格が高くなっており、特に荷動きが悪い。

9. 小売

首都圏では住宅新築・改修の需要低迷により、資材全体の需給が緩み、単価を下げても買い気にはつながらない。必要最小限の当用買いが続いている。国産材構造材は依然として実需が弱い。夏場以降、原木不足が続いており、今後は品目により不足感が出て値上がりも予想される。外材構造材も欧州材製品を中心に荷もたれ感が強く、WW集成管柱やRW集成平角は弱含み。製品価格も底ばいで、しばらく当用買いが続きそう。国産材造作材では、スギやヒノキの板類は価格も安く、店舗向けなどに引き合いがあったが、原木の出材が少ないためか単価も徐々に上がり始め、売りづらくなってきた。

参考資料

(一財)日本木材総合情報センター

令和6年11月22日

1. 主要外材入出荷在庫量

		入荷量	出荷量	在庫量
米材	丸太	→	→	→
	製材品	→	→	→
欧州材	製材品	↘	→	↘
北洋材	製材品	→	→	→

注)北洋製材品は東京・川崎

矢印の表示は今月に対する翌月の動向を、下記のように示したものである。

- ↑ 急増・急上昇
- ↗ 増加・上昇
- 横ばい
- ↘ 減少・低下
- ↓ 急減・急落

2. 合板供給量

国内製造量	輸入量		
	計	インドネシア	マレーシア
→	→	→	→

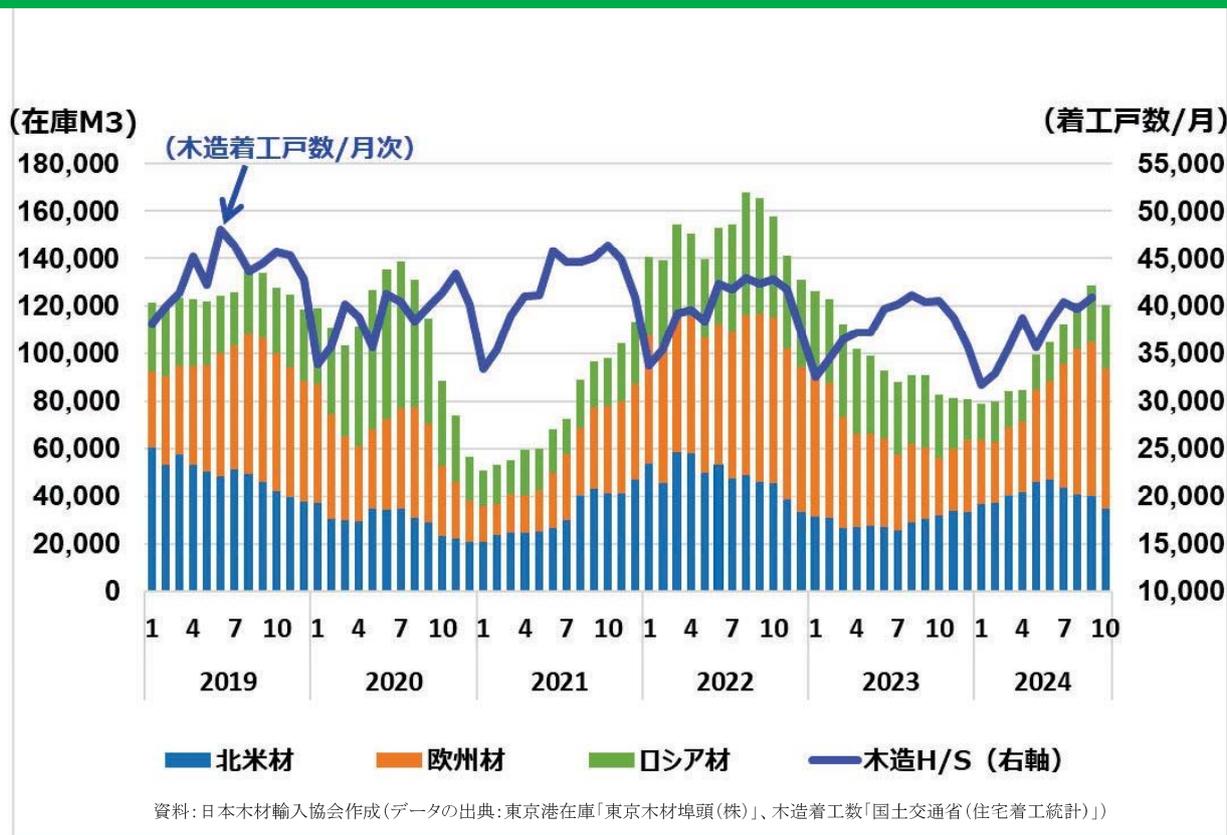
3. 価格動向

樹材種	形状	取引条件	樹種・寸法等	動向
国産材	丸太	卸売価格 (北関東、県内産 市場土場渡し)	スギ柱材(3m) 2等	↗
			スギ中丸太(3.65m) 2等	↗
			ヒノキ柱材(3m) 2等	↗
			ヒノキ中丸太(4m) 2等	↗
	製材品 (関東近県産 板は東北産)	首都圏・市売り 価格	スギ柱角(KD) 10.5×10.5×3m 特等	→
			スギ柱角(KD) 12.0×12.0×3m 特等	→
			スギ間柱(KD) 10.5×3.0×3m 特等	→
			スギ加工板 1.3×18.0×3.65m 特等	→
			スギタルキ3.0×4.0×3.65m	→
			ヒノキ柱角(KD) 10.5×10.5×3m 特等	→
ヒノキ柱角(KD) 12.0×12.0×3m 特等	→			
ヒノキ土台角(KD) 10.5×10.5×4m 特等	→			
ヒノキ土台角(KD) 12.0×12.0×4m 特等	→			
米材	丸太	産地価格	米マツ ISタイプ	→
		国内卸売価格 (京浜・オントラ)	米マツ ISタイプ コースト	↘
	製材品 (カナダ産・ 現地挽き) (国内挽き)	東京・間屋店頭 渡し価格	米ツガ桁角(KD) Std&Btr S4S 10.5×10.5×4m	→
			SPF 2×4 J-Grade R/L	→
欧州材	製材品	東京・間屋店頭 渡し価格	米ヒバ土台角(GR) Std&Btr 4・13/16” 13’	→
			米マツ平角(KD) 特等 10.5×24.0×4m	↘
北洋材	製材品	北陸・オントラ 京浜・オントラ	ホワイトウッド’ラミナ 2.4×11.0×3m上 ラフ乱尺	→
			” 間柱類 3.0×10.5×2.985m S4S FOHC	↘
構造用 集成材	国内産	東京・間屋店頭 渡し価格	アカマツ原板(KD) 40×165 1~3等	→
			アカマツ(KD) 30×40上級	→
	欧州産		アカマツ(KD) 24×28 積木	→
			”	”
合板	国産	東京・間屋店頭 渡し価格	ホワイトウッド’ 集成柱 JAS 5プライ	↘
			レッドウッド集成梁 JAS 105×150~360×3.985	↘
			スギ 無化粧 JAS 5プライ	↘
			ホワイトウッド集成柱 JAS 10.5×10.5×2.985	→
			レッドウッド集成梁 JAS105×150~360×3.985	→
			タイプ2 F☆☆☆☆ 2.3mm厚 3×6	→
			タイプ2 F☆☆☆☆ 4.0mm厚 3×6	→
			型枠 12.0mm厚 3×6	→
			針葉樹構造用 12.0mm 3×6 F☆☆☆☆	↘

注)令和6年4月調査よりレッドウッド集成梁(国内産、欧州産)、アカマツ原板を追加

参考図表 1

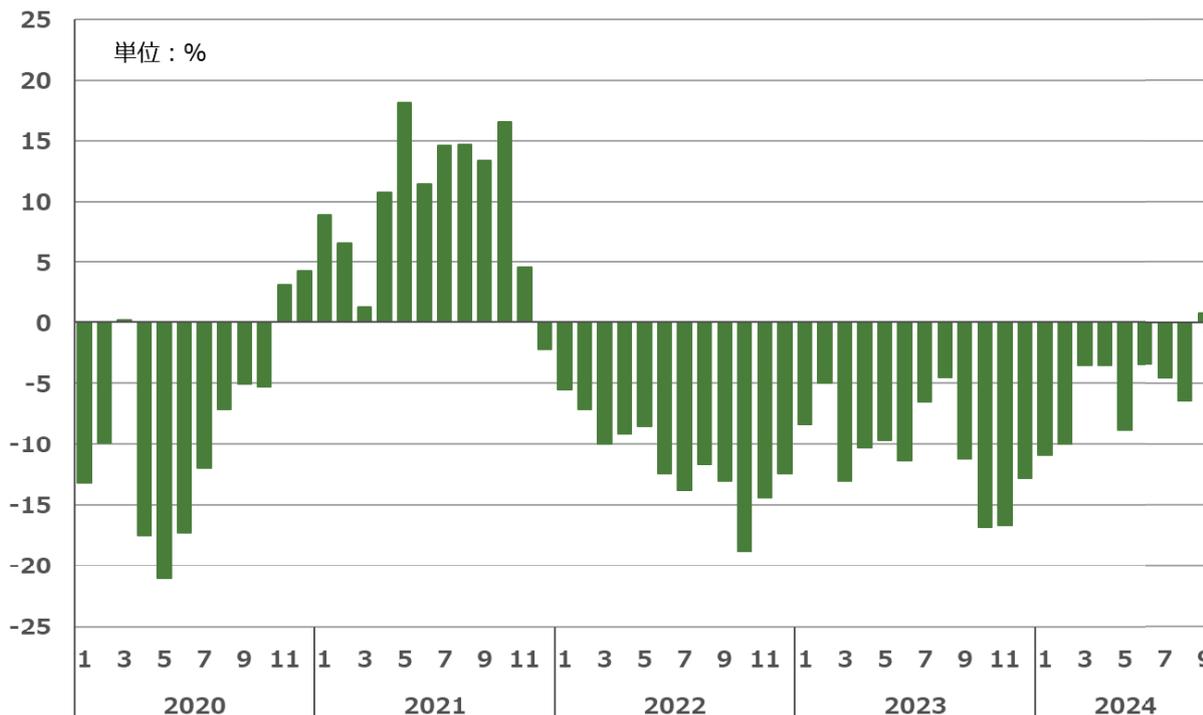
「東京港製材品在庫」と「木造着工数」の推移 2019～24年



参考図表 2

木造持家住宅着工戸数の対前年比の推移

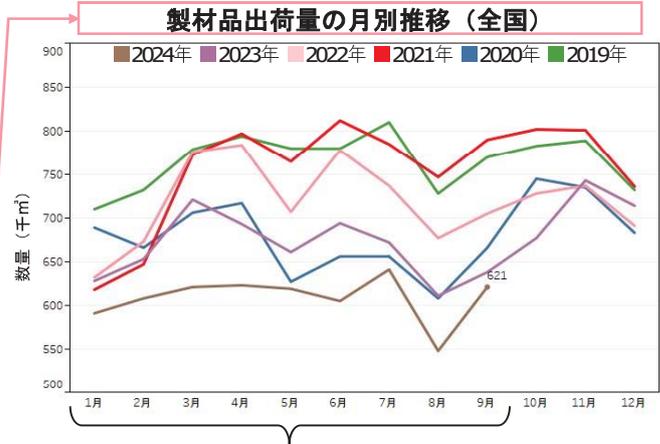
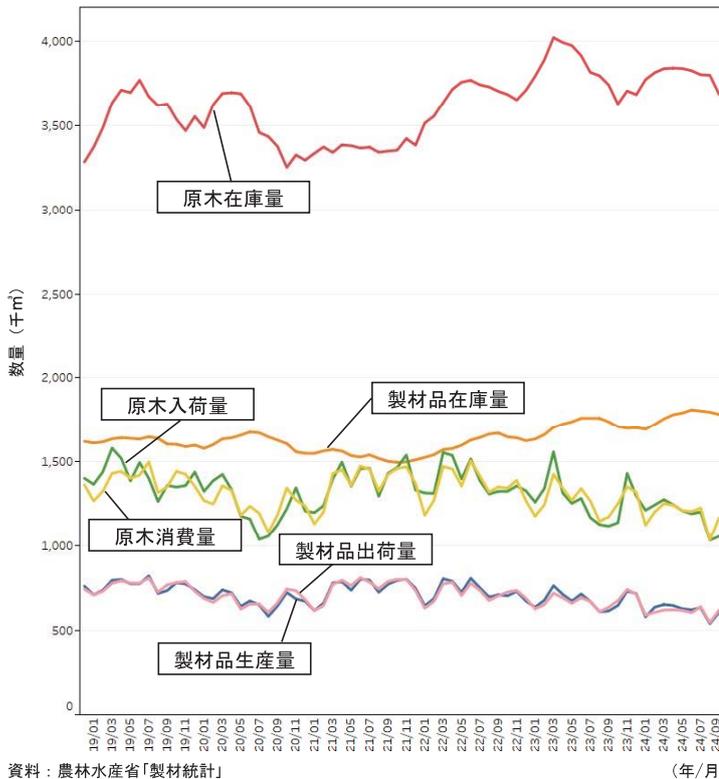
住宅着工戸数のうち、国産材の使用比率が比較的高い「木造持家」着工戸数についての、対前年比率。



参考図表 3

工場の原木等の入荷、製品の生産等の動向 製材（全国）

- 2024年1～9月の原木の入荷量は10,682千m³（2019年比83%）。
- 同様に製材品の出荷量は5,477千m³（2019年比80%）。

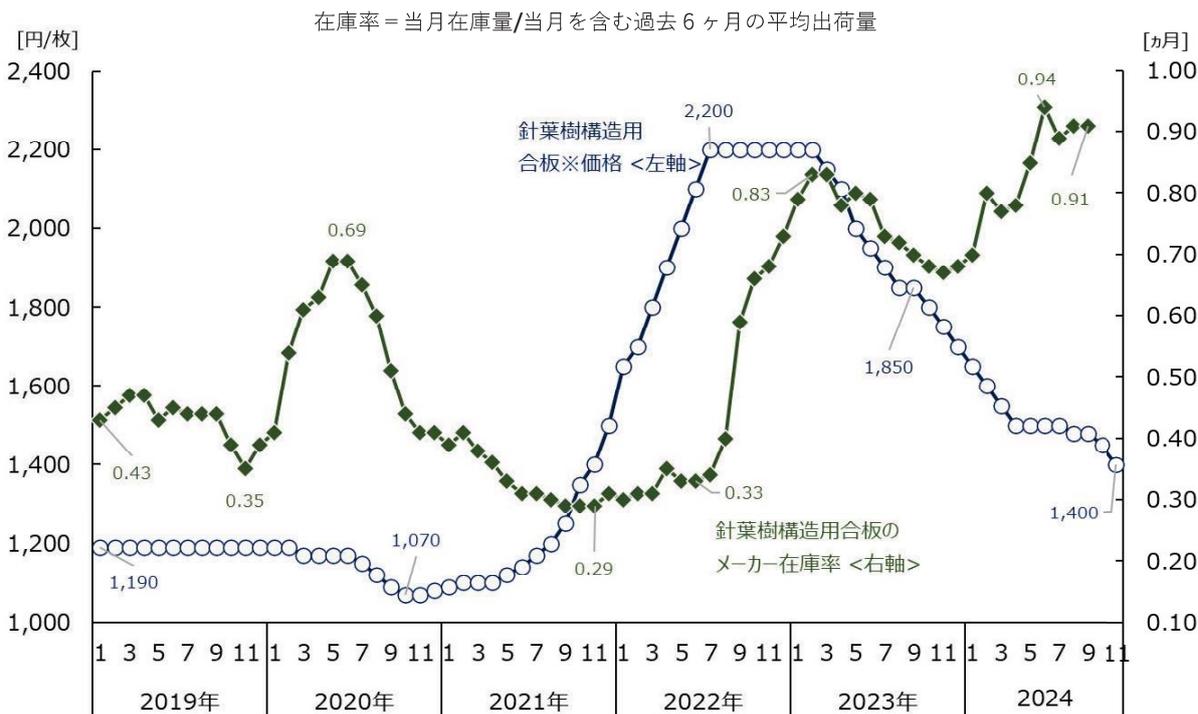


	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
1～9月原木入荷量合計(千m ³)	12,823	11,045	12,346	12,664	11,438	10,682
2019年との比較*	-	86%	96%	99%	89%	83%
1～9月製材品出荷量合計(千m ³)	6,883	5,991	6,734	6,469	5,971	5,477
2019年との比較*	-	87%	98%	94%	87%	80%

*コロナ禍前の2019年の数値を100%とした比較

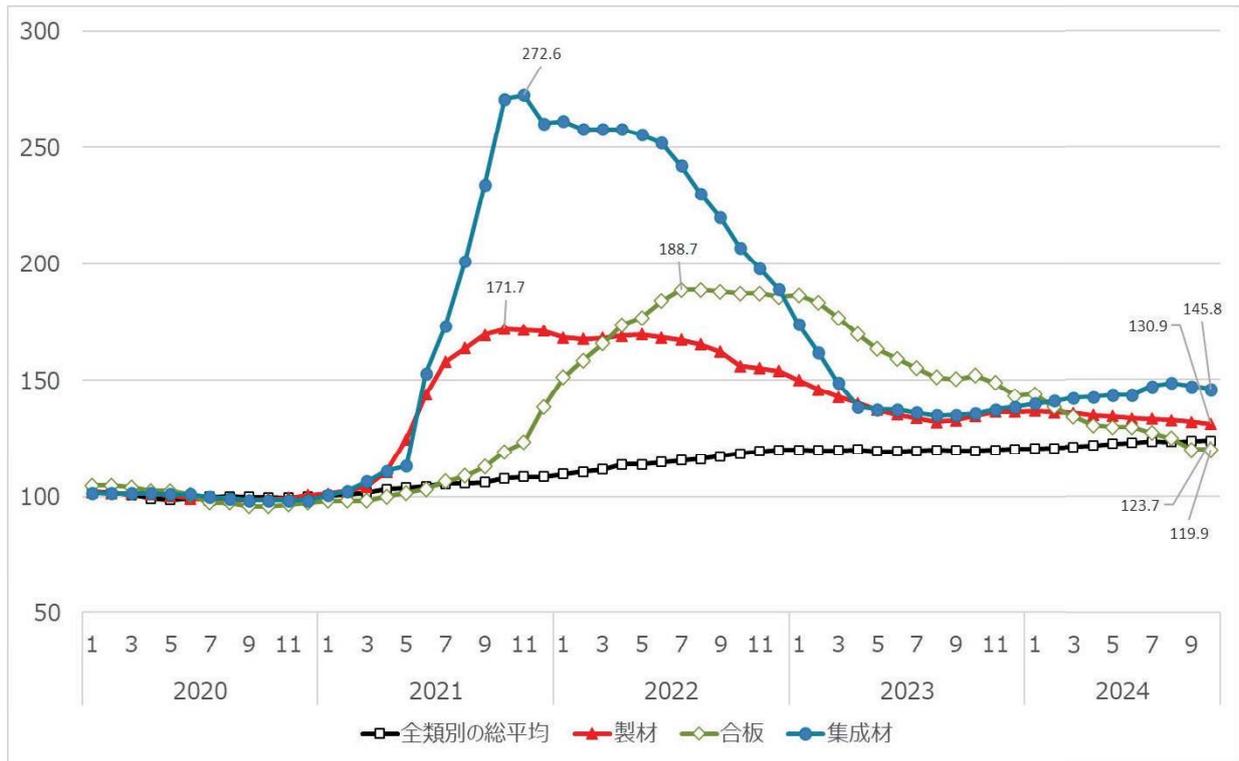
参考図表 4

針葉樹構造用合板価格と合板メーカー在庫率の推移



※12.0mm×91cm×182cm、1類

国内企業物価指数の推移（2000年平均 = 100）

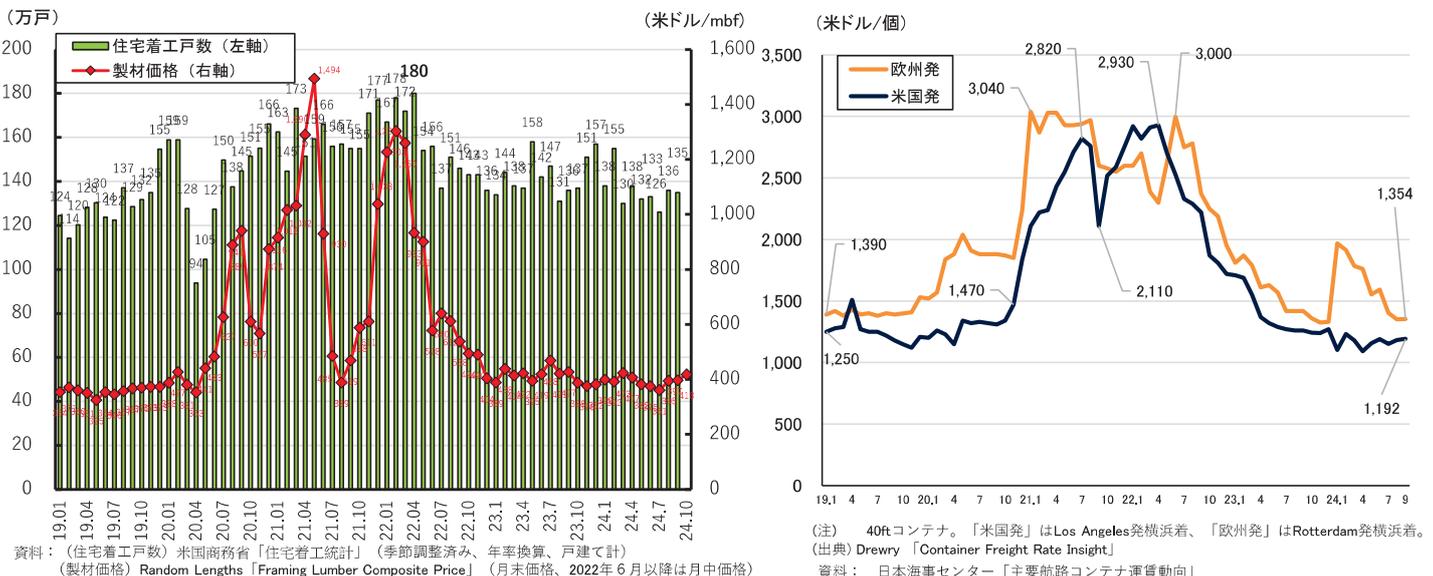


資料：日本銀行「企業物価指数」

米国における木材価格の動向等

資料：木材輸入の状況について
(林野庁木材貿易対策室)

- 米国の住宅着工戸数（戸建て計）は、新型コロナウイルス感染症の影響により2020年4月に急落。その後回復し、2022年5月からは概ね130～150万台で推移。2024年9月は前月比▲1%減の約135万戸。
- 北米の木材価格は、2020年夏頃から大幅な変動を繰り返し、2021年5月には1,494ドル/mbf、2022年2月には1,303ドル/mbfを記録した後、2023年以降は概ね400ドル/mbf前後で推移。2024年10月は418ドル/mbf（前月比+5%増）。
- 日本向けコンテナ運賃は、欧州発、米国発ともに一時期高騰したものの、2023年末時点で概ね元の水準まで下落。しかしながら、2024年1月には、紅海でのフシシ派攻撃によるサプライチェーンの混乱の影響で欧州発が一時高騰。



米国における住宅着工戸数と製材価格の推移

日本向けコンテナ運賃の推移